



# 「弥生時代の塩づくり」

## いずみさの昔と今 第325回

来年1月21日(土)より冬季特別展「大阪の弥生文化―和泉と河内―」が始まります。和泉市に所在する日本唯一の弥生の専門館、大阪府立弥生文化博物館(来年3月31日まで施設改修のため休館中)と泉佐野市立歴史館いずみさのがタッグを組んで開催します。展示会では、大阪の地に花開いた弥生文化を多角的に紹介する予定です。

まずは地元、泉佐野市に関するトピックから。本市は、弥生時代に日本列島有数の製塩地帯だったことはご存じですか。日本では古来より生命の維持に不可欠な塩を、海水を煮詰めることによって得ていました。煮詰める専用の土器を製塩土器といい、縄文時代の東日本に出現します。製塩土器が使われるということは、自給自足的な調達から、塩生産の規模が拡大し流通で広く供給されるようになったと考古学では考えます。

れました。当初の製塩土器は現在の高環(たかつき)と同じ形態で、本市湊遺跡からは、初期段階の製塩土器が出土し、本格的な塩づくりが和泉でスタートしたことがわかります。

湊遺跡での製塩の最盛期は弥生時代終末期(約1,800年前)でした。ビールのトールグラスのように形態が変化した製塩土器が多数出土します(写真)。濃縮した海水を長時間火にかけて製塩土器はもろくなり、さらに出来上がった塩を取り出すために、土器はばらばらの状態で出土することが普通です。海水が原料となる塩づくりは海のそばで行うので、浜辺の遺跡から多数出土します。

湊遺跡は海岸から600mほど離れた場所にあるため、ここで海水を煮詰めたのではなく、出来上がった塩を取り出すなどの作業をしたのでしよう。遺跡の住民が浜辺に向いて塩づくりをしたのです。湊遺跡では、未使用の製塩土器がまとまって出土した地点もありました。全体の形がよくわかるめずらしい資料で、祭りに関するものかも

しれません。塩づくりの最盛期だった弥生時代終末期は、大和(奈良県)や河内(大阪府東部)などで大規模な集落が出現し、内陸で塩の需要が高まりました。このため隣接する和泉の海岸部で塩づくりが盛んになり、塩で地域が結びついたのです。和泉と海との深い関連は展示会でさらに掘り下げます。ご期待ください。



▶湊遺跡出土製塩土器 (弥生時代終末期) 提供…(公財)大阪府文化財センター

レイクアルスタープラザ・カワサキ歴史館いずみさの ☎469-7140 Fax469-7141 休館日 月曜日、毎月最終木曜日(いずれも祝日の場合は開館し、その翌日が休館) 開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで) 入館料 無料

### 日本遺産・北前船文化を巡る⑩ ~野出墓地~



「日本遺産」に追加認定された「荒波を越えた男たちの夢が紡いだ異空間 ~北前船寄港地・船主集落~」のストーリーを構成する泉佐野市の文化財等を紹介し



問合せ 文化財保護課



▲豪商食野家・唐金家の墓石が多く並ぶ野出墓地

「野出墓地」は、野出町に位置する面積約7,300㎡、墓石が5,000基以上の大規模な墓地です。海に近い場所にあり、三味松と呼ばれた松林が広がっていた名残を見ることができます。佐野町場・佐野浦の外れに造られた共同墓地で、かつては火葬場もあり、江戸時代より葬祭業を営む家が代々管理を行っています。この墓地には、入り口には六地藏・6観音(市指定文化財)、地域相撲の関取の記念碑や天保大飢饉の碑のほか、区画された豪商食野・唐金家代々の墓域があります。食野・唐金家の墓石は約30基が口の字に整然と並んでおり、墓地の中で占有できる力を持った豪商であったことを物語っています。墓石群はこの地に多い和泉砂岩ではなく、花崗岩製がほとんどです。よく見慣れた直方体の墓石の形ではなく、低い正四角柱のサイコロ型を呈しています。その他にも佐野漁民と交流のあった五島市赤島、能州(能登)の商人の墓も見ることができ、佐野浦の交流の多さを今に伝えていきます。